

おわりに

今回、小穂型の地理的変異の研究結果をもとに、タイヌビエの由来について仮説を述べた。今後、この仮説を補強していくには、水田以外でのタイヌビエの生育地や日本に稲作を伝えたと思われる地域でのC型の分布を明らかにする必要がある。DNAによる地理的変異の分析も必要である。しかし、タイヌビエはこれまで典型的な稲作随伴雑草であり、史前帰化植物であると考えられてきた。そのタイヌビエにおいて水田稲作の伝播以前からの日本で

の存在の可能性が示されたことは、重大である。DNA分析技術の発展もあり、侵入や拡散ルートの推定精度は高まっている。また、考古学的手法によっても可能であり、史前帰化植物について新たな見解も提示されている(那須2018)。日本の水田雑草フロアの成立過程については、科学的な研究による見直しの時期にあると考えられる。

引用文献

- 榎本敬 1993. 雑草フロアをつくりあげる帰化植物. 山口裕文編著「雑草の自然史」, 北大図書刊行会, 札幌, pp.17-34.
中山誠二 2010. 「植物考古学と日本の農耕の起源」. 同成社, 東京, pp. 205-263.

- 那須浩郎 2018. 稲作農耕伝来後の水田雑草フロアの変遷. 山口裕文監修 宮浦理恵・松島賢一・下野嘉子編集「雑草学入門」. 講談社, 東京, pp. 50-65.
藪野友三郎 1960. イネの雑草としてのノビエの型について. 農業および園芸 35, 1327-1328.
Yabuno, T.1961. *Oryza sativa* and *Echinochloa crus-galli* var. *oryzicola* Ohwi Seiken Ziho 12, 29-34.
藪野友三郎 2001. ヒエ属植物の分類と系譜. 藪野友三郎監修・山口裕文編「ヒエという植物」, 全国農村教育協会, 東京, pp15-30.
山崎純男 2008. 「最古の農村 板付遺跡」. 新泉社, 東京 pp. 38-91.
保田謙太郎・中山祐一郎 2016. タイヌビエの小穂C型およびF型の日本国内での地理的分布. 雑草研究 61, 9-16.

田畑の草種

八重葎・勲章草 (ヤエムグラ)

(公財)日本植物調節剤研究協会
兵庫試験地 須藤 健一

アカネ科ヤエムグラ属の越年草。全国の人里近くの藪や道端にごく普通。茎は柔らかく4稜を持ち、稜には棘がありその棘で他の植物に絡みつき立ち上がる。高さは80cmから1mくらい。花冠は4裂し雄蕊は4本。6枚から8枚にみえる葉にも棘があり衣類に付着する。この葉を切り取って服につける遊びがあり「勲章草」とも呼ばれた。

日本在来で、古人の目にもついていたはずである。万葉集に作者不詳ながらも相聞歌が2首。

思ふ人來むと知りせばやへむぐら
覆へる庭に玉敷かましを (巻11)

玉敷ける家も何せむやへむぐら
覆へる小屋も妹と居りてば (巻11)

多くが知っている歌としては小倉百人一首にも採られている
恵慶法師の歌。

八重葎しげれる宿のさびしきに
人こそみえね秋は来にけり (拾遺和歌集)

昔は栄えていたこの家も訪れる人とならず八重葎が生い茂るさみしい家になってしまったが、それでも秋は昔を偲ぶかのように確実にやってきたことよ、と恵慶法師は詠う。しかし、ここでいう「八重葎」は今でいう「ヤエムグラ」ではなさそうである。ヤエムグラは越年草で、秋に発芽し春から初夏に繁茂する。秋に「ヤエムグラ」が「しげれる宿」はないのである。

古来「八重葎」とは、「八重」に生い茂った「葎」(密生して藪を作っている雑草)のことであり、そうであれば、万葉集の2首も、恵慶法師の歌も、人が訪れなくなって荒れてしまった庭のことか、と領ける。

では、恵慶法師が詠った「宿」に繁茂していた「葎」は何だったのだろうか。棘があって他の植物に絡み合い、藪を作る秋の草。似つかわしいのは「カナムグラ」であろうか。アカネ科ではないが藪を作るところはよく似ている。秋が来た宿に生い茂っていたのはきっと「カナムグラ」であつたに違いない。